

丹鶴叢書

萬代和歌集 十三十四





萬代和歌集卷第十三

意哥五

題不知

燒後撰恋三

仁和清製

八燒後

と同上

人をもひのくも此くもいあきむすりてよたのすあきら

寛平清製

新平載恋一

人をもひのくも此くもいあきむすりてよたのすあきら
延喜の時時もくのまことへ入るゆゑ

女藏人二條

玉築恋五

秋をもくね我もとくこの度もくあともうかくもやかくもけくの

燒後拾遺恋四詞答

ひうら

延喜清製

もかく 同上

秋をもくね我もとくこの度もくあともうかくもやかくもけくの
燒後拾遺恋四詞答

を院た大主

國之有司者，其無以爲急乎？

卷之三

呂叔子親記

延喜開闢の法は即ち天子の御事

۱۶۰ مارکا

女清
葛履仁善子

卷之二

卷之二十一

延喜詩集

毛江更衣 源周子

思ひ出ぬ時もあつて下宿のあいだのまゝもさうだ

卷之三

王 えみのうす
ねかそと人の入をうり
タヒハナムニ二日斗

先生之言，實向大發也。

法性寫道書宣白大政大書

女は、お前を、見る
民が、見るやう

（つづき）おもひだれをやうやくあまゆかのふくらせ

法性を入道の如く見ゆるゝ如人云々こと

同憲五

卷之三

新拾
光明峯寺入石

新合遺恋四

前半納立它家

りゆう花の後の、さかにあらわすよしをとる

從二位家隆

繞千載恋四

題不_知

如是者數日，方始得其意。

新千載
卷四

文獻卷之三

續後撰恋四

鏡後
志のくと

子鳥上文三

兼院もくよむるのむすめをもくゆ

卷之三

之序

セイシキノモト

新千載恋五
まひいたる
女性の入をもて度白の家をし
うる新千

被志

堯文異志五

舊約大傳

おまかせの事だ。おまかせの事だ。

中納言家

もくい一本

身とまことに人の心と情をもよおしてゐるからやうやく今
わが身のやうに 老大納言たゞら

此卷之序文
卷之二

清二位家序

平經正統書

いふをむかへておもひてゐるやうな顔で、おまかせしておる

詩人一之集

三書志三題不知

がく年承助

玉 つるうる女の
がくよめあひこと
のとこみたせはうの女
あつまへる

葉恋五

のいもむかわらひにかくすとおもぬくせう

後ニ桑内大寺

ひたかわらひにかくすとおもぬくせう

太宰大弐主家

さのひととくらひにかくすとおもぬくせう

本院侍従

徳吉 さくら女の
じきそくまうれでけ
さとあくまくふ徳
くまくまくまく徳吉

徳吉今恋四

忠義公

身 しのうととくらひにかくすとおもぬくせう

まえ之女

玉 葉恋五

かくとくらひにかくすとおもぬくせう

お摸

同恋五題不知

徳後

三条院女藏元近

徳後撰恋五

徳後

玉のうこのゆふ

床 とほ

同恋五

おのづくらひにかくすとおもぬくせう

志のめおゆり 院三位教氏

徳裕遺恋五

おのづくらひにかくすとおもぬくせう

お縁經をうやまと

蘇居士氏和也

新後拾遺恋五
題不知

基俊

續後撰恋五題不知

五
わくふみのや

王
乘
卷五

卷之三

あさやかにひるくゆき

「本居宣長著書」
著者本居宣長
著者本居宣長

德後拾遺卷四

卷之三

古漢後京本草

我亦嘗訪之，未嘗不以爲子雲之子也。

燒後誤恋五
八傳沈萬慶

身之謂也。故曰：「我無以與人，則已。」

丹霞集

文選

王忠信
院少卿

十三人六

うそをついてはいられない。でも、おまえの心が、どうかわからぬ。おまえの心が、どうかわからぬ。

繞古今恋五

法橋顯昭

あらそりやまとくわく
おもてのまへ

李氏親書

書法

宋 托法師

の御子の御心をうかがひておもひます。おまへはおまへの御心をうかがひておもひます。

卷之三

西漢書

小
柳
季
綰

後編

毛氏
卷之二

後撰五

卷之三

文政元年正月廿二日
吉田義徳

望之像也。故其子上繼

卷之三

平烏集

卷之三

般若院大軸

後撰恋三

後

九月廿二日
晴

卷之三

土清院伯耆

وَالْمُؤْمِنُونَ

卷之三

法惟入道者實能窮經究義

卷之三

الله رب العالمين

清東野史卷之三

孫師光

我身わたくしはおかずおかずのまゝなまなまハハとつとつあくやあくやくくままハ
悪あくと
衣きぬ立たつあ内うち大き大き

卷之二

衣笠も内大臣

宣大府之方文佐成

繞古今恋五

二
よ

まくらあらわさめむかくもつゝみゆのまく
歌一うき 待賢つ院たかひき右一本

丹鷄集

そのめをハシモウタマシテ
カタマリタマシテ
かわらあたなまくと
清心のとみよし
後

清心のとくまくにゆる
かわらけたまごと寝候

讀人言

堯復異恋三
戊午即役慶現王家大和

人情の如きは勿論、

卷之二

卷之三

武乾院清画

後拾光明略文
亦指政事三十多事

入道寺持政家村二十号下

梓大納言室

山階入乞方大臣

塔院寺

二條大臣太后御持

卷之三

一葉のうらやましいものと
人のよきよきのものと
え一本

九象右大史

卷之三

繞十載恋四

子思子集

王兼應四

まゝ鳥立とらむと
傳來の右大也

あらうとまことにひのきをあわせたててあるやうだ

風
卷之三

此保四庫院停至是日

洪二位家陸

云々とおもひて元良のことをいふ

よみ
かひ

続後 無のあの中には

おもむきとまごのくわはやうめぐらむとくのもの也
たいへんひ
みえ
続後撰恋二
ちの続後

同
志の手

同憲四
あくまでもやがておもひだされぬであつて、ゆるめのやうの

王
秋のさん

中納言完叔
葉恋四

孫萬沈

如是等事皆是汝所知者

達矣

繞後撰憲四

派院指政局大會

卷之三

九條ま内大臣。
続後拾遺恋四題不知

守るを志と 俊吉法師

九條あ内大臣

卷之三

繞後拾遺恋四題不知

續古今恋四

同上

セウム、五

卷之三

おひここの事の心地がよきが、おひこ

道信和尚

かのうのわがうはぬをやふすやうめのくまくと
いもくとくよきよきのうきのうきのうき
田之山のまつりのまつりのまつりのまつり
題経おおむねのまつりのまつりのまつり

王葉恋五

故人車上人題此詩於南歸山中

中
蒙古文

續後拾遺雜中

題不就
和白式說

仁和居

清少納言

卷之三

王葉亦心五

主之女

新羅國王之御書也

望江院清時艷寫合

花園たゞや小大進

مکالمہ میں اسی کا انتساب کیا گیا تھا۔

甲
文

卷之三

國防内侍

まへらす
寂智法師

卷之三

吉田松陰著　新編宣經

延喜歲次庚午年夏月
王氏子孫

卷之三

丁巳年
延喜詩集

西宮あだれも

此卷之文皆出其手。其文雄深雅正。不苟作。不苟用。故其文有神采。有思致。有風韻。有氣骨。無一毫之浮華。無一毫之穢惡。蓋其人之才德。實足以成此。而其人之品行。又足以重此。故其文之傳。必能流芳於後世。而不朽於今也。

三

卷之三

拉大納立立國

樂一派之流傳者甚多

卷之三

繞千載恋四題不知
一九三九年秋

丹雀叢書

毛保四事清而無之

後鳥羽院清和

志はやうやくまほの様うじゆのゆうだつても
志十日お合つゝあらわ

入道も接歎たるも

東隱居士

本居宣長著
繞吉今恋五

日吉社五十年ノ事ニテ

税部成卷

गर्वानुभवी देवता के जैविक विशेषज्ञता का अध्ययन करने की उम्मीद है।

後黎朝文

鳥羽後之朝詔遠約
本

子傳之矣
抑亦使鄙陋

卷之三

六帖題記

修定稿序

尹宦叢書

千載忠五
萬葉抄

海國志
若水

是之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

後高極換改家六百萬金小

荀子

種多寡與其生長之適宜程度有密切關係

蒙古文

卷之三

六傳右大史家

まことに、おまえのうそかほんとうか、わからぬ。

蘇原惟綱

金人

鳥之子

支那の文人画と
清の成績

や萬の御事かと云ふ所也

蒙古語中「我」的詞根是我，「你」的詞根是爾。

續後拾 光明峯寺入
道立

民部之典傳

西漢書
紀後

おもでりをす
ちのまゆのかわらのとくわがのねぬくはれをひ

後堀河院教之
大納言左大臣

後撰恋一
出上

後撰一

小後德

校書納言後大司馬司馬士衡十數年不離手

卷之三

卷之三

卷之二

德千載恋五

卷之三

洞院授政事不

酒家長熟也

此卷之書皆為其子所寫

卷之三

卷之九

後漢書卷之三十一

萬象圖

卷之三

被忘卷之三

の間の事は、おまかせとおもひておまかせとおもひておまかせとおもひておまかせ

中
國
文
物
考
古
學
研
究
院

毛唐唐樂

まのほのめこゑす
意まくらひあかね我よふす

歌

三衛宮女行

徳後拾遺憲四女御儀子文王

もよ生むてうきのじのひまつまわるやうもやうる

涼ち又

ほりもくわらそがふるせらむとすてあらむ

二條院序は絶高と云ふと

刑部の詫色

坐す處にたまてどもかうむすめいす

徳吉 宝治三年百三
写本

藤原 隆祐

徳吉今恋五

徳千 大吹の大臣
えへんおひきの大臣
うへんおひきの大臣

こゝとがまもとみゆけつとのたゞそハ神ミツみくわしきだん
もくへくがくをすくうみくわしきだん

コトナシテ

柱大納言実五

徳千載雜中

く、ハヤシタヒタヒモサキもあきゆくも許もお節セキつ
九条あ内大臣をあせり一施セキと

あ中納言教資

徳後 建保二年内六ト
裏

今半とあそびてうきのじのひまつまわるやうもやうる
八道局は及内大臣の付をまつまわるやうもやうる

前中納言定家

繞後撰惠四

まへーらす 勝奈ほゆ

絶するよしとあがたかきとへやまなうひをうきとむ

西りほ師

まへやうのあがたかきとへのをねとたやうとたのまくとまく

久あ玉くよ 皇太后あたま人後成

くわううのむよけめのうへやうとやまんとまん

入まお接政内たせの時

従二位家隆

まうう接神のまよめまよめいくのからとまく

繞千 光明峯寺入乞

家鳥立と 雨のつ院小室お

繞千 宝治百五十九
玉まくタマハシナウ

まよめ境うよめまよめのとうのあくとめやれあく

あくまよめまよめまよめせう境玉くよ

繞千 載應四

藉に行家れせ

じくのゆゑのまよめをあくとめ人のまよめまよ
後まよめ接政家ふちをぬむ合ノ

法橋題詔

山鳥のまよめをあくとめのまよめまよ

鳥のまよめと

法橋題詔

まよめをあくとめをあくとめのまよめまよめまよ

卷之三

あつらまほめやひたえのせゆるのいは

卷之三

えのものごとくのれども、かむらをもせんじと

遇不意之火入矣。後日大也。

古事記

題不以和爲式部

卷之三

大約言胡光

之の事はかまへておけの事の如き

續後摺應五

王 オレのものやうる
オレのうひぐる女の
もとへゆふあまく
りうかるあらうれ
ハが女のかくタクゼ

10

十数歩の舟を又用ひてゐること

此卷之文皆出其手

卷之三

卷之三

後撰題五
題不知

洞院按政家而立之令不無益
前一本
新後本

西周之政

後主絕接政事亦高祖之子也

家納申乞之也

王
卷二

被忘焉
葉公隱祐

偶見此書，甚為之驚異。不知其人何以能成此書也。

王光明峯寺入道

入道寺修改承秋之十三日

文
內
傳

王
其
風
之
於
人
也
也
不
以
爲
其
風
也

鷹司院抽定

故人不以爲子也。故曰：「子之不孝，無比於人。」

右大行是娘母

新編
御文庫
古文書
卷之三
殷富院大輔の傳

中納言資實

卷之三

かくえのくわくわくとくわくわくとくわくわく
かくえのくわくわくとくわくわくとくわくわく

馬内侍

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく
まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

玉葉恋五

じつわーおやゆ

小箱

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく
まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

題一

小箱

宣仁門院一條

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく
まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

参議資季

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく
まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

玉葉恋四

薄庵お縫致世

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく
まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

寄歌五

藤原隆祐

まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく
まくことおかかわくのうきはるもくおもむくまく

遇不逢

子言叶

まつめの後
希乳母

流後
人

藏書之印

卷之三

四

1

卷之三

続古
恨意の如き

式乾門院山廬

卷之三

同上

卷之三

四

新合貴

新今

そのうえはいよいよ、

卷之二

風ふやまくらえ

萬代和歌集卷第十四

雜音一

春日モニタタキの音

花山院清製

王葉雜一題不知

右太主の付ひも三つ

卷之三

祐子門親王家引合子

式部

風雅恋四

尹窩畫書

おのづいのむら

水經注

まくまくの教とておが萬葉里へとどくやあ
洞院持政家百三十九聯と

翁太政大臣

まくまくの教とておが萬葉里へとどくやあ
小溝海のめりあつてのまく

まく保内義景公より江上をあす

徳拾遺雜春

や徳拾

従二位家隆

徳拾の教とておが萬葉里へとどくやあまく

満毛と義と

清祐院臣

徳拾の教とておが萬葉里へとどくやあまく海士の約海

まく教

薄尼秀能

あすの教とておが萬葉里へとどくやあまく

あす子比古おもよくするをまかばたまひる時

奏一侍

伝教由性

春あくまのめりとおもふがまおおせんじゆさと

まくまく寫座とまくと

よしわせむき

まくまくのめりとまくとおもふがまおおせんじゆさと

まくまく使と任

まくまくのめりとまくとおもふがまおおせんじゆさと

も月とまのめりとまくとおもふがまおおせんじゆさと

尹、崔、書

十四

卷之三

批把宣太后宮

王也月の千日あかり

四五

題石

前王
右大將道綱母

王兼應四
八同上

和亨式初

天水二年歿山東

蘇東坡集

山城やまのまにうみの都へゆるあらゆれを
たいきく 真照法師

たいちく

喜照法師

卷之三

元
輔

此亦爲之多也。勢終不以爲意也。
不以爲意者，則無所取也。

王葉雜一詞原

庚子年

丹鳥叢書

玉葉雜一

ひのこにやうすくはなまつとへんてあとこくを

まちの教のゆよ 二品親王 手水

じよするふみのくほもとしむよあくよすもすも

按室仕事仕

まの田とおもかげておもひおもひて我をもう

赤海坐

玉葉雜一

あとのくわくわくわくあたてて又ハやうのまくありき

朱雀院門付山中すむすむ梅もじとほくと

くわくわくとほくとほくと

一条命歸

玉葉雜一

1

中院入道右大ち家が合ひ

よしらしら

燒後春のあの中

如願法師

燒後撰春上

まきがるまくはあくは梅ふきよくまく匂ひのれども

西院御の中ふ 萩原秀能

あくはやくはよくさん梅ふむくすくのこやゆよも

暁あくとよ 源具親王

はくとくとくとくとく毒花あくつまくまく深のゆ

百多故あくとよ 春月と

藤原光俊

信本

もひのゆすふ

一ふ資子内親王

アシモハム人モトモト有板のセキアムリヨスヤムマツの承

寛喜女店入内屋風アシモハム

ア太改ちも

アシモハムナのうけ絶アシモハムナノウケツルアシモハムの寅人

深雪流

アシモハムナモヤシメシムニシテの深雪のアシモハムナモヤシメシムニシテ人

大にかう

アシモハムのぬまやシマモイミのうけよシムと

季之女

アシモハムナモヤシメシムの深雪のアシモハムナモヤシメシムのうけよシムと

ア大作正行等

月半アシモハムナモヤシメシムの深雪のアシモハムナモヤシメシムのうけよシムと

九条前内大臣

基徳吉

アシモハムナモヤシメシムの深雪のアシモハムナモヤシメシムのうけよシムと

美久三年内裏アシモハムナモヤシメシムのうけよシムと

阿大納アシモハムナ基徳吉

アシモハムナモヤシメシムの深雪のアシモハムナモヤシメシムのうけよシムと

文治女序入内屋風アシモハムナモヤシメシム

三傳入道尤大也

おまえのやうな約のあつたまへこむるおのれは
花と侍ふと 権位に免

花と侍ふと
權位に見遍

二
卷之三

今朝の朝まで數年生とおなじ園塔もいり
侍ふるまつて終まつてくはれども花のいぢり

प्रसाद विश्वनाथ

はやし入道がお改め大吉
はやし入道がお改め大吉

中華書局影印

卷之三

王葉春下

建保二年二月三日内二
年の事と申候

後鳥羽院清光

繞後撰春中

八
繞後

乙 一本

九、重の衣も老ぬ。かうなまかとこりがははのとくう
後まわすのよつてへまきさんとはくも

四

{

孫生

同春中
前題後

一
九

後京極抄前抄方政大少

同春中
ハニカムホークのあらわせハニカムホークのまじへハニカムホーク

花とよけの 信正良因

子鳥集

僧正り意

おとくのくわくのまくわくあらう、あらうのまくわくのまくわく

基 俊

よかよかはちのむかひよかよかよかよかよかよかよか
おおつゝよかよかよかよかよかよかよかよかよかよかよか
同上のよかよかよかよかよかよかよかよかよかよかよかよかよか

津ち圓基

徳吉今哀

あすかきよかすかすかすかすかすかすかすかすかすかすか

三五十六三五十六三五十六三五十六

ね ち

なまきのうおれがまきがまきがまきがまきがまきがまき
春情まうれまうれまうれ

ほそ時れせ

まくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
おえうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

津ち圓基

様ぞうぞうぞうぞうぞうぞうぞうぞうぞうぞうぞうぞうぞう

見うみて

平 信 敏

やうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

校大傳教學院

ヨリ

続千葉の下の書ふ
続千葉春下
の諸本続千

の諸本徳千
院千載春下

庚申花朝之日
樞使至京

卷之二十一

也。其の事は、
其の事は、

仁和人也。一名致祥。字家。七十多岁。

従後
花の木の下小
麦子資宗教主

沈後撰春中

卷之三

徒々おもひをかう故人のよきあいやうのまゝに
大宰大臣

太宰大臣の志

後德大士大夫也

其後有子曰玄，字子房，人稱張良也。

中納言

綱捨 春のさくら
さる人の桜のむぎうて
さりげせはなみえのじ
一回一あみてよし侍

千尋の御代

八條院三室

王葉雜一

幸とまつての御代を承り候る所はけり

前代は

登本

沈延法は

おもむかへ事とあらゆるものあり

西河源師

山風の御代を承り候る所はけり

尚達舎あるひはる

諸本舊

清輔教院

都江口の御代を承り候り又おもむかへ事

篠吉

花歌

藤原資隆教也

花歌文もこの御代を承り候る所はけり

藤原敦家教也

うみの御代を承り候る所はけり候とはけり

座主辞り御縫おくと仰多時より

佐西仁實

やまとやまと御代を承り候る所はけり教也

さややまとも

坂山右大モ

さよてうふ衣を拂と若すをもる里下の事ある

後鳥羽院御附五千の古事記もとある

王葉雜一
王葉雜二
王葉雜三
王葉雜四
王葉雜五
王葉雜六
王葉雜七

後言極極改太政大臣

あきれよかつまゆの谷風をなのまよこすまかくは

花のすせやふ 海老左大臣

春風の様年くおもあきよつての風の聲もどりう

按室伎通の家十日よの庭じと

は鶴頭照

徳
花のうのゆふ

徳
古今春下

こゑをみよ風のうよまく風をじとむちよまく風
始る経のよしふ 袋詰麻衣子

七の歌のふもあややまくしよとハ音ミテ風の白浪

を江戸急所家す合

徳ノアラム
草とじとじとじとじとがやもじとじと
甲斐ふくしすくのふとく

能因は師

かひりぬくはよけくあ是のひよ思ねやまかのむ
後白山院法行くまよまよもおのひよ
あさるとくく 平原教

あさとよかがくはまかくよあくよめんよまの氣
紫つる車のりようとく

寛永教

子宦書

十四

其後又以爲不可，乃更請之。其人曰：「我固知君不識我，但恐君亦不識我耳。」

春の唐木は中止
土清門院寺割元

建保四年院清正首領

道も改めたり

おとづれやうの。おとづれの音と消え
日雇王

春日遲了獨坐天龍寺

王葉春上

宿王

卷之二

仁和人過一品親王也是家主十之而
亦合

鴻臚

まゆの少翁たゞまくらをのべかまめうとせよほせよ
後漢書校讎家六百萬字合ノ

法橋顯昭

まことにやうやうのまへんが、うそそのも人あつて
よぬこ鳥す 小侍従

九月廿二日
宿河院房中

拉大納立了實

主の御心をうながすものとおもひます。

後頬絶也

車窓のなまきの園のよきもなまほくの御あわせ

影一うす

三つ絃

呼子もまのむかくとゆがくわくあるひとひのよ

とくさく

病のねのめぬまのむらの世もあさまへたる

堀川院門附後玉

藤原歌仲絶也

たを身のひる場所のひばみくまかきよせかくあま
馬命ぬうめいむくまかく風かくくらかく

かくまとくらはくま

宮の歌也

ひうゑ

因歌院門歌

みどりよしにのむらのむらのむらのむらのむらのむ

佐吉祐世六三に 藤原隆祐

ひじきのまことひのとひのとひのとひのとひのとひの

影一うす

藤原歌絶也

うつむきのまことひのとひのとひのとひのとひのとひのと

寛太后宮大支後東

続後陪侍少守
むまくつまく
侍

子雀書

十四
十二

王一品官
とよ後冷泉院左宮
少翁ノサムニマ
かへせまく差わ
住毛姫うらは上東
門院内ノミサムニ

後朱雀院歸時二月
門院內小
風吹落葉
落葉隨風
落葉隨風

二條院

王葉縣三
そくせきあさーひのくわかをよこすと
おもむかげ

同誰三

上東門院

花散
一
やよひのやうこうはくのくわくとくわくをね
あふかくはくはくはくはくはくはくはくはく

回參太皇太后
御洞院接政家事

洞院援政家而立之。蓋有才人也。

宜太后宮大史後女

前大納言院あらわの御子の花をうたひ
かくは

卷之三

花もと葉もと花もと葉もと花もと葉もと花もと葉もと
あや葉作の月

卷之三

十四 / 十三

遼女祇壽

花波はのまちおもてたわらあくよハリモロコ
述懐百々歌よみ傳ふる二月と

皇太后宮大史後成

五十九

促二位家降

五
卷之三

夏啟中
和東武部

かくまへとまわる年折れのまわらゆきまわらハ
と木

三叔父親王元良

衣笠を内方に

東之條院ノモモトモサシニ

鏡後撰雜上

民也ともも

一本鏡後

もくすす首の絆のをさうと持のまつともひて
洞院持改家百々

あ中納言家

袖の毛のむようの毛の毛の毛の毛の毛の毛の
六帖題のをア 而大内もあ
侍へよがみの毛のあもあへともはすがふるは
せせせせ
於か伝教院嘗
たがくもくのせふもももももももももももももも

淨覺上人

中納

ワタマツリハシメルモハシメリハシメリモハシメリモ
五月もつてのをもつてのをもつてのをもつてのをもつてのをも
もの玉少ひまといつて そぬ

室えれハあとすのをもつてのをもつてのをもつてのをもつてのをも

まひーとす あ大納言良

支しのをもつてのをもつてのをもつてのをもつてのをもつてのをも

前參議忠之

まことわざきのひきほのこくに早るゆゑ

新後
さくとよなほ

新後撰雜上

王元良親王
けいおう

玉葉恋五

信人

宇治より鵜舟と云ふ

右大將道縦舟

うきよふねとひらめくむすびのよがう舟也

友説の舟

俊軒舟

じあそよかくねとひらめくひがなよがう舟

好舟

友川のせに船つよがうとひやうとひやう

船もひきのうのうとひやうとひやうとひやうとひやう

西行法師

がくあくやねのうとひやうとひやうとひやうとひやう

よかく

夏にしきうとひやうとひやうとひやうとひやうと

法師献因

おすみのほまくちうのよがうとひやうとひやうと

高橋改左衛門の時のひやうとひやうとひやうと

信宣舟

家のほのせのよがうとひやうとひやうとひやうと

じゆ院より夏月を

ちのせは師

かくはあはるの月がはるかにかかる
ゆゑとよむとよむとよむとよむとよむ

かくは約をよみとて聖系のすまうれり
を保三事の衣をまつ

あ中納言家

かくはあはるの月がはるかにかかる

まへづらひ

後鳥羽院唐雲

かくはけすまはまへづらひやまきせのめひ

桔中納言長方

かくはあはるの月がはるかにかかる

藤原大輔

かくはあはるの月がはるかにかかる

松基はは

かくはあはるの月がはるかにかかる

赤樂開口

かくはあはるの月がはるかにかかる

花院唐雲

かくはあはるの月がはるかにかかる

道濟

白あとよそふがとあるがまきの秋ともかた
せらむせし一する日、ひとのとひゆるせ

さうぞく

あらす身のれども、ゆきはるはるのあひに
ちひのあひる 恵慶はゆ
人のふやのねどもやいのなむんこのまの秋のれども
源賴家越中ちよもあともくもとて、ほりく時
かのまの名所とひくわへはくす本葉
卿と

よし人へ

吹くある風のよどこせし、せし本葉のまの秋のれども

松子と 西り詠師

風のよどく物をすみのりほてあすみる秋のよどく
寂勝四天王院障子へ因幡らま

皇太后宮大臣後成女

またまくまくのよどく、ほくとくひいなまのくせ松風のよどく
内大臣の門のよどく

入道前揆政大臣

ひづりやつのねまくまくせば夕にはくも松風のよどく
入道前揆政大臣三十

蒲原佐重良教也

徳古 秋のすみ
光明峯寺入道
前揆政大臣

徳古今雜上

なづ源氏物語の秋の風景
秋風歎老と云ふと

惠慶法師

秋風の吹くよしも吹くゆきも吹く
まゝいへらひ

土居の院

落葉はるかに吹きむかへてのうるる

まほ保内春衣秋千本多新後拾

參詳雅經

新後拾遺秋上
さひへりすてかえりて、唐の歌うそせじあらそおれよ

秋風のゆき
源家長

燒後遺秋上
さひへりすてかえりて、唐の歌うそせじあらそおれよ
前攝改家

源兼氏

燒後遺秋上
さひへりすてかえりて、唐の歌うそせじあらそおれよ
前攝改家

正三位和家

燒後遺秋上
さひへりすてかえりて、唐の歌うそせじあらそおれよ

般窟門院大浦玉三子

すか納言實

秋の風はちよこすよもよきやがくもよもよけ

禪子内親王家ふく令り時と

馬

十四十九

詩文曉得，詩意可掬。其筆力雄健，氣魄宏大，足當一派之宗師。題一卷
式子內親王

題一
式子內觀

徳後
焼りそと

卷之三

この事はとてかくもあらぬ事であつた。田のもの
土門院御歿

玉清門院御繁

後京移接改家六百萬石合

新拾遺雜上題不知

103

لِلْمُؤْمِنِينَ

正三位季經

是と云ふは

王葉雜三

槿花堂主人
山因法師

いのちもしくはあまむとよめむたる様のも
毒中をぬれること

仁和寺八道二品觀音完性

新後拾遺抄上
月清うかゆよ 坂元の院御製
石くわくの門のふきはくとすらと出る月夜
玉を清うかゆよ お保月夜

丹雋集

新後拾遺秋上

尹雀書

十四

月三十日の事より

後拾遺紙
續後拾遺紙

右たまちの時の元氣、後は傾き入るも復かず大政をせ
大ちよあくまづもじぬとハ種々のもじよ月のとくとくも

卷之二
急流大信正

此の文書もかのじきの文書も
さに二年八月十五日和歌山三月有

王清心所大書

本
風の音を聞かず
月を保て
月を晦むと云々

前中納言正通

二條院唐不景
刑部之勅書

後拾遺秋下
神奈の二本ノハサウエアリテ
此本

春秋とある事ひのうすまちよくいふる。人世も
とくに心つむく事ある

菅原孝標女

人間の事は、おまかせをうながすのである。

新拾 人のあふ女
の月みづかみづく

新拾遺雜中

うす宿のもよどみくハ村のよむ日よくとよつぱり

月影蕩尾とてとことと

雨をまゐる馬のさきとと材宿も月をと牛あはるるのれ

建保内裏衣百萬⁺新拾

八桑院も念

新徳古今雜下

いそとひよしそとひゆくおまんばよもくぬ月の先尔
月思ねとふとと 菊京穴銀新拾
まやくとてと月れるのねぬめとくとくとくとくとくとく

就の月とろては 俊和新也

毛川もとくはやあよしにほ清くもとある月の新^ト
小と月とよす。能因法也

山のあらうす月新ハぬとて里きぬ焼セラモ
江上月ま 徒三佐新也

いまと新は源にの草がまくとく月かくまもあき

雨は月とまると 皇太后あたへ俊承

吹きまよがの風まよはまくとくの生の月

湖を月と 深仰光

さくはやまのまよはまくとくの生の月

新千載秋下

玉葉雜五

月のあかきをあらわす月の名づけられた

山田法師

なまつよかふとある月の月の名づけられた

和多天王

ひつまほくのつむぎの草木ふきみの月といつても

楊貴妃歌也

あとのあむ月をうしなひてむろんのくづけも

桔や納豆敷也

あかの菊のせきゆ中とくじゆうやうづくは

三教の歌も元也

続後拾

歌

千代遺應三
くにやううひよこのまがよものむらさきあらわし

徳吉

歌

おひつる時とくを歌うもとまのふくともひづか

恵慶法師

みのまほほほほほほほほほほほほほほほほ

三教の歌も元也

風もかくおもての萬のまのうみつねのまくもく

鴨長明

まつむのせきよかのまのまつとうせきよか

徳後昌泰正月八月
十五夜分合之名

おなづかゆめす秋むきよまことのそとくわらひ

めく月せうつ人のかうへつまくらむ

和泉式部

秋すみるをとくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくのゆくかうへつまくらむ

さくま

紅葉すまむれのうのせふ物口すまくまくまくまく

題くらむ

ゆくえ

紅葉すまむれのうのせふ物口すまくまくまくまく

二郎親王 元良

神無月をくまむあくまくとくひ出もとのくまくまく
すみゆるこのくまむあくとくかくてもゆく神
ま保四事院清風

入道あお改たぢち

続拾遺恋四光明峯寺入道前接政大吉

ふ続拾

くまむのくまむあくまくとくひ出もとのくまくまく

述懐のくまむあくまく

れくまくめしむるくまく神のくまむとくひ出もとのく
こあるくまく

接改また改ちち

草中ふさも一のまのハヤホのもの多の音と我とあうる
百萬歌の中ふさと どく とぬ

秋景くじかのれ、ば草生びくよしよ柳の、の水

にあら入道ニ家教をきえ 家主たまう

正ニ佐季子経

あかづまとひつてく傳へのくとむすめす、せ風

きのうとおゆふ すくま

きうちぬがふせぐる民のひとたゆづむわやいのなか

西河法

徳後拾 秋のくま傳
修竹玉出はるきさく
桂大納言小廻のをく
徳拾遺放

あかづまとひつてく傳へのくとむすめす、せ風

きのうとおゆふ すくま

きうちぬがふせぐる民のひとたゆづむわやいのなか

西河法

徳後拾 雜上

ねと徳拾

くはとくちとののむとよとよとよとよとよとよとよとよと

前大作

我うおひこのとくかふも口あぬまむすりあむすりあむ

ほ半玉湯のとくじゆく

佐敷吉寔

徳古今雜上

山田

山田

山田

俊軒翁也

詠はるつあてよかじのいのこゆくとさかわ
ふうと 能因はゆ

流つものとよどむハーフレヤシタマリシのせゆ

新千載雜上題不知

もあ やかまよほほのうみのうまじのやまとよ
せ新千

素應ニ手はるひをすでアーハ鳥と訓と
りすよ

促ニ位頼政

孟子子孫のうきのめ

右御經の孟子 右三衛尊基氏

風ふるはのととの吹ふるはのと城のあめなれ

鳥ふるはととと 平経正義

みのああまのととと風ふるはとととお鳥

まいへとま

ゆりはゆ

何とがくまのとととおまでもおまくとある御子の里

建保四年院法をさう)

もう中納之元家

むらへあへんのとととをとせばこえもとまくとあはつ
きのふまげる 一品資子内親王

かまくととはまくとあるもハ

まのぬかるむをさるね枝にはくく併勢
大浦をふはくすむ

燒後撰冬

藤式珍

紫燒後

おみのねまよあらきよもつれまするを
大峰の禪院と所そへやのふくらむ
こゑほとくはなむ

佐正り

新平四十九院のゆき
のゆきふみるよ雪
のゆきうある風の
くわははとばよ

坂本吉清

まかみよゆのゆのかくらむと
ほり一使くとよくちのすくと
ほり

三百六十里よしのゆ

新平載雜上

あへこひらきのゆふきアカモヒモノのゆふきの

五郎の山持中納少因信こひのゆのゆ

シキのゆはのゆのゆのゆのゆ

坂山院中宮上総

諸人まつまくとくとくもあらふくとくとく

ホニミアホナホナホナホナホナホナホナホナ

のゆよしのゆよしのゆよしのゆよしのゆよしのゆ

送候おもむくゆるをうなづいて又の
日雅とつまひと 実方おせ
たつてのうめせ、がくくものゝもとへんのれ

うゑ

道信教主

人をもくよきゆきよきのゆきをもくと
ゆく院門付正月と

後林教臣

炉风

風雅雜上
火もくよきの下ある程のうめのゆきをもくと
おけの内ちやくまく植梅待春と

ほ仰光

室事とよする よみじくらま

続古今雜上

うつむこのゆきのゆきやまくともまくとくにゆく

信生はば

老ぬよしよくさとゆきやあわすり白日あはす

俊惠法師

たすくもほくわくといふもいふもいふも

皇太后あま天後女

くわくわくあめ老のあとおうかくはかくの承
えあふまく

清林教主

王後法性寺前園白
あふおもあすかと伝
くわくわくおめ書

王葉冬

新徳古今雜上

たゞ

除夜のこうと
肴核の備因

もよもよおまかまくおも
まやまやおまかまくま

